慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 安定均衡の経済表に就て : ウーグ博士の フランソワ・ ケネーの経済表 を中心として |
| Sub Title | Tableau economique in equilibrium concerning mainly "The tableau economique of François Quesnay" by Dr. H. Woog |
| Author | 渡邊, 建 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1957 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.2 (1957. 2) ,p.118(46)- 132(60) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19570201-0046 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570201-0046 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

# 安定均衡の經濟表に就て

## ――ウーグ博士の『フランソワ・ケネーの經濟表』を中心として――

渡邊　建

### 一

マルクス Karl Marx は一八六二年六月十八日附のエンゲルス Friedrich Engels 宛の書簡に「若し貴君を煩はすことなく極く簡單に出來ることだつたらイタリアの簿記範例（說明つき）をお願ひし度い、ドクトル・ケネーの檢討に必要なんだが」（Der Briefwechsel zwischen Marx und Engels,—Gesamtausgabe Bd. 3, S. 78）とケネーの學說の研究に着手することとなつたことを傳へてゐるが、それから約一ヶ年後の一八六三年の七月六日附のエンゲルス宛の手紙に同封された一葉の「マルクスの經濟表」にはその餘白にケネーの範式が書き添へてあり、この「同封した經濟表は私がケネーの表に置き換へたものだが、若しこんな暑さでも出來るなら丁寧に調べて何か君の意見を述べて欲しい。それは總再生產過程を包含してゐる」ものでこの「私の表は私の著書の終りの方の一章に總括として揭げられるものである」（Der Briefwechsel zwischen Marx und Engels, Bd. 3, S. 149.）と述べてゐる。

斯くして經濟表が印刷されてから百年餘にしてマルクスによりて經濟學說史上に正しい位置に置かれることとなつたのである。而してマルクスの經濟表の研究は『剩餘價値學說史』に又エンゲルスの『反デューリング論』に發表せられて居り、經濟表の解說として最も秀れたるものとして認められてゐる。然しながら、マルクスの研究の對象となつたのは經濟表の範式のみであつて、その原表には及んでゐないのであつて、而もその範式に就てもケネーが遺した謎はそれが創案せられてから二百年近く、又日本に紹介せられてから五十餘年となる今日に於ても、未だ內外の研究者が一致した解釋に到達して居ないのである。

ケネー生誕二百五十年の昭和十九年に筆者は經濟表がいづれも數字と點線とより形成せられてゐることから、先づ第一に、各表に使用せられてゐる數字の論據を「經濟表の生成發展」（昭和十九年の「三田學會雜誌」第三十八卷第二號揭載）に、第二に經濟表（原表）の機構の解說を「經濟表解註」（「三田學會雜誌」第三十八卷第三・四合併號揭載）に、第三に經濟表（原表）から範式への發展の過程と範式の解釋を「經濟表の省略化と其範式」（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號揭載）に企圖したのであるが、その以後經濟表の研究として、越村信三郎教授の『ケネー經濟表研究』東洋經濟新報社刊行「現代經濟學叢書」第一卷（昭和二十二年―一九四七年）とウーグ博士の『ケネーの經濟表』"The Tableau Economique of François Quesnay—An Essay in the Explanation of its Mechanism and a Critical Review of the Interpretation of Marx, Bilimovic and Oncken, 1950" が發表せられた。

又坂田太郎教授は「讀まれることの少ないこの思想家（ケネー）及びその學派（重農主義經濟學派）」に就てはデール Eugène Daire やオンケン August Oncken の「ケネーの著作集」以後にバウエル Stephan (Etienne) Bauer やシェル Gustave Schelle によりて公表された諸「論稿を含む著作の周到な檢討からはじめ直さなければならぬ」と考へられ先づ『ケネー經濟表以前の諸論稿』（昭和二十五年）を出版せられたが更に『ケネー經濟表』（昭和三十一年）の表題の下に經濟表に關するケネーの諸論稿を現在に於て可能なる最大限にまで、執筆の年代順に集めて邦譯せられて、ケネーの經濟表の構想の時間的推移を檢討し「原作が名うての難物」であるから、斯くその原態をつきとめた上に立つて經濟表諸表の構成の變化を探究せられ「矛盾は矛盾なりに、曖昧は曖昧なりに」譯者としての經濟表の解說を發表せられたのである。

社會的總資本の再生產及び流通に關する分析を研究する越村信三郎教授は『ケネーの經濟表の研究』にて、その「再生產の問題」にとつて、より包括的な、より完成された形式をもつところの「範式」を分析し、その基礎の上で「原表の檢討にうつること」（同書一〇頁）にせられたのであるが、ウーグ博士はケネーの經濟表とはヂグザグの機構の「原表」であつて、『經濟表の分析』の「公式」は經濟表の創案者ケネー自身によりて描かれた經濟表（原表）の解說のための一表式に外ならぬものであるとし、この公式（範式）を思考素材に使用して經濟表（原表）の機構の完全なる理解に達せんとするものである。故に博士は「範式」は經濟表の最終結論としてでなく、寧ろ說明のために介存する一手段と見做すべきであつて『經濟表の分析』という表題そのものが、その意味を簡明に表現してゐるものとするのである。（"The Tableau Economique of Frangois Quesnay" 1950, p. 9）

坂田教授は「ただ漫然と原表と範式とを比較して、そのどちらかの優位を語つたりすることは當らない。たしかに社會的總資本の再生產過程を資本流通を介して、しかも貨幣流通を資本流通の契機として描こうとしたことは、範式の注目すべき特徵であるが、しかし原表とても、單に個別資本の動きを寫そうとしたものではない筈である。原表の場合もその狙いは社會的資本にある。ただそれは社會的總資本の單純再生產を生理學者らしく、ひとつの解剖學的斷面として、しかも社會的平均において、描こうとしたものに他ならない。（切斷面であるから、總過程をすべて表示することは無理なのであらう。）そう考へることが假りにできるとすると、原表こそは生理學者ケネーの構圖として適わしい構成をもつのであり、それこそが

"tableau fondamental" なのであり、範式は略表とともにその説明圖に過ぎない、或は範式はたかだか説明圖としての略表を改良したものに他ならない、ということにもなるのである。」(「譯者解説」八五頁) と解せられる。然るに「從來の經濟表の研究家は殆んど範式を對象とし、原表は敬遠するか、またはせいぜい二次的なものとしてとりあつかつてきた。それゆえ原表それ自體の研究文獻は至つて乏しいのである。」(「譯者解説」四九頁) として原表に就て新たに獨自の解釋を試みられ、それを第一圖 (「譯者解説」四八頁掲載) に表式されたのである。

斯く其の後に於ける經濟表の研究が範式の解釋から新たに原表の説明に立ち戻つてゐることに就ては筆者も贊意を表するものであるが、範式をもつて、原表を説明するための一表式に他ならぬものとするウーグ博士や坂田教授の説には同意し難いのである。而も又、いづれも範式に就ての在來の疑問に何等解決を與へてゐないのである。

## 二

經濟表 (原表) のメカニズムの完全な理解に到達する思考素材としてウーグ博士は先づ『經濟表の分析』の範式を檢討するに、マルクスの解釋を更に又、ビリモヴィッチ A. Bilimovic の解説を尊重してゐる。博士はヂイド C. Gide が其の『經濟學説史』"Histoire des Doctrines Économiques depuis les Physiocrates jusqu'à nos Jours" に「彼 (ケネー) が若し今日生きて居れば、恐らく今日の所謂グラヒックを用ひて遙かに、其の構圖を明瞭ならしめたであらう。然し驚くべき事は、彼の死後、彼のためにその勞を取らうとしたものがなかつた事である。」(ibid., p. 21, note 3.) とあるを引用し、ビリモヴィッチこそ、このヂイドの期待にそふて範式を一つのグラヒックに描き直したものであるとしてその圖表を掲げてゐる ("Das allgemeine Schema des wirtschaftlichen Kreislaufs"—Zeitschrift für Nationalökonomie, Bd. X, Wien 1944, p. 199 ff.—H. Woog, "The Tableau Economique of François Quesnay," p. 48: 本稿第一圖)。更にそれをウーグ博士は彼自らの解説圖表に描き改めて (ibid., p. 49. 本稿第二圖) それによつてマルクス (ibid., p. 50. 本稿第三圖) ビリモヴィッチ並びに博士自らの範式解説の圖表 (ibid., p. 58.: 本稿第四圖) の比較檢討を容易にしてゐる。

これ等の圖表に使用されてゐる略號は、Aは農産物、Af は食料として消費せらるる農産物、Ar は原料として使用せらるる農産物、Bは工業の製作品、Lは貨幣、Rは地主階級の所得即ち地代、租税、十分ノ一税の請求權、これ等の一單位はウーグ博士の解説にては『農業哲學綱要』の略式 Formule abrégé の如くいづれも一千リーヴルであり、範式の場合は十億リーヴルである。

これ等三つの圖表 (本稿第二、第三、第四圖) を比較してウーグ博士の範式の解釋の要點を擧ぐるに、

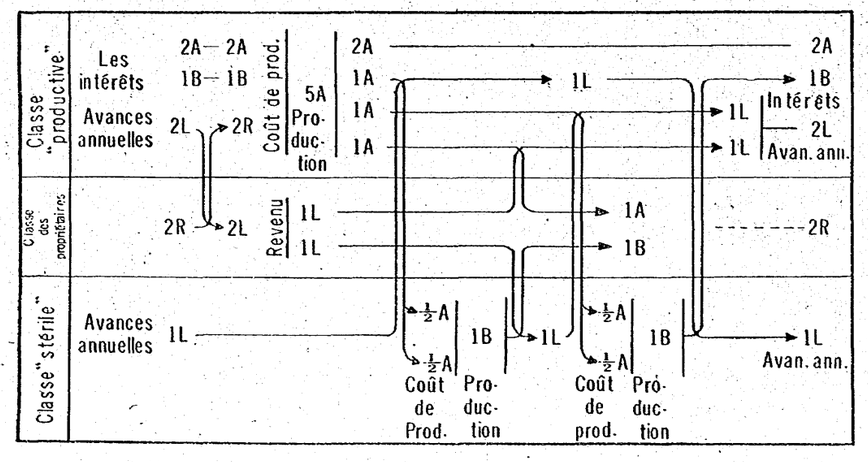
(一) ウーグ博士の解説にては生産階級の年投資をマルクスと同じく農産物二單位 Af+Ar とする。

(二) ウーグ博士の解説にては不生産階級の投資をビリモヴィッチと同じく貨幣一單位 L とする。

(三) ウーグ博士の解説にてはマルクスの如く循環開始當初に不生産

第　一　圖

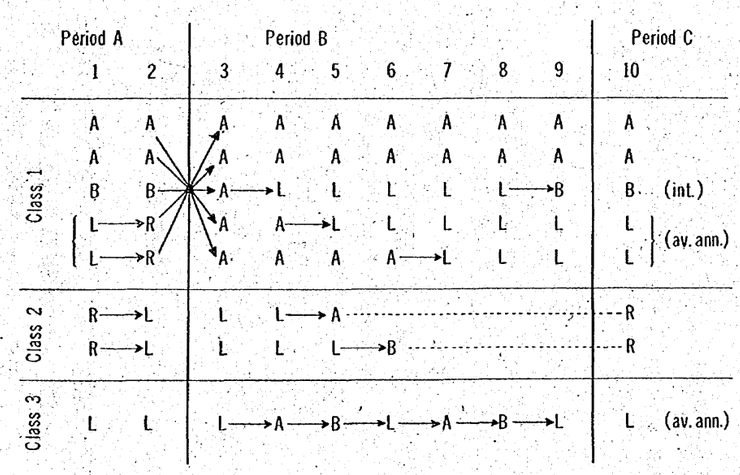
ビルモヴィッチの範式の解説表






第　二　圖

ウーグ博士の表示するビルモヴィッチの範式の解説表




安定均衡の經濟表に就て

階級に製作品二單位の存在を前提とせずして、ビリモヴィッチや坂田教授と同樣に一ヶ年間の循環の間に原料並びに食料とする農産物の購入、製作及びその製作品の賣却の一連の過程が二回反覆せらるるものと解する。

(四) ウーグ博士の解説にては、農産物五單位と製作品二單位の賣買過程に必要なる貨幣量をマルクスやバウエルの如く二單位とせずしてビリモヴィッチや、三邊、久保田兩博士と同じく三單位 3 L とする。

更にウーグ博士は範式の循環を(a)貨幣面からと(b)財貨面からと二つに分けて表式化してゐるが (ibid., p.59.) 博士の範式の修正表は次の如く掲載されて居る。(ibid., p. 57：本稿第五圖)

次にケネーの範式とウーグ博士の修正表との相違を考察するに

(一) 生産階級の年投資に就て

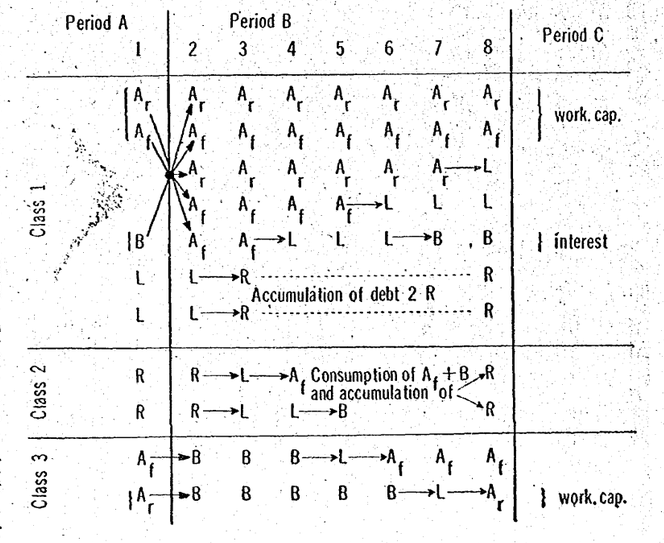
ウーグ博士は生産階級の年投資は農産物と解するものであるから、その修正表に於ける生産階級の二千リーヴルは農産物賣却代金三千リーヴルより、不生産階級へ製作品の代金として支出せる一千リーヴルを控除せる殘額 Résidue の貨幣二千リーヴルであつて、それは地主階級に納付せらるるものであるが、ウーグ博士はビリモヴィッチの如く、それを年投資とは解してゐないのである。(ibid., p. 48, p. 49, p. 58.) 從つてウーグ博士の修正表に範式の生産階級の年投資と同じ位置に二千リーヴルが記載されてあるが、それは年投資ではないことに注意せねばならないのである。

(二) 生産階級から地主階級の地代・租税・十分の一税が納入せられる過程を示す點線の有無に就て

ウーグ博士は經濟表（原表）との關連を深からしめる意味に於て、ケネーの範式に除かれてある地主階級の所得が生産階級から納付せらるる過程を追加してゐる。但し、經濟表（原表）にては地主階級の所得を生ぜしめた生産階級の年投資から點線が描かれてゐるのであるが、ビリモヴィッチの解釋の如く生産階級の年投資としての貨幣が地主階級に納付せられるといふことではないのである。

第　三　圖

ウーグ博士の表示するマルクスの範式の解説表

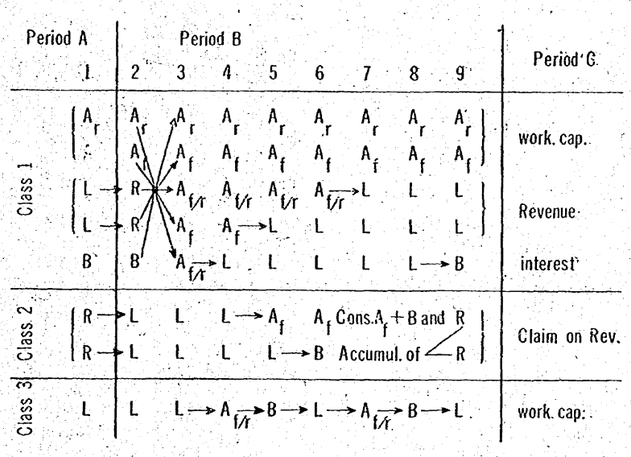





原表のこの「生産階級の年投資と地主階級の所得とを結ぶ點線」に就て坂田教授は原表のヂクザクの支出過程以外の生産・不生産兩階級間の一支出過程とする獨自の新しい解釋を試みられてゐるが（「譯者解説」四六―四七頁參照）、筆者はこれは原表のヂクザクの點線にて表示せられる地主・不生産兩階級に賣却せられた農産物（純收穫）二單位の代金が生産階級の年投資として使用せられて、その百

第　四　圖

ウーグ博士の表示するケネーの範式の解説表




安定均衡の經濟表に就て

パーセントの純收穫從つて地主階級の所得が再生産せられる當該年度の過程と同樣の前年度の過程によりて生産階級の小作人が使用せる年投資が地主階級にその所得の支拂を可能ならしめることを表示したものと解釋するのである (Tableau Économique, p. ii: 邦譯岩波文庫本一八頁、坂田譯本二五頁參照)。

(三) 不生産階級の投資の支出に就て

ウーグ博士の修正表 (ibid., p. 57：本稿第五圖) の不生産階級の投資によりて購入せられる農産物一千リーヴルを地主階級が所得の一半にて購入する農産物一千リーヴルの下の位置に描けば、不生産階級の投資の支出に就ては範式と同じことゝなる（本稿第八、第九圖參照）。又不生産階級の生産階級への投資の支出が生産階級により直ちに製作品購入のため再支出さるるとするウーグ博士のこの表示は『經濟表の分析』に「この投資は何物をも生産しない。それは不生産階級によつて支出さるるが、また元に戻つてくるだけで、年々歳々いつも同じまゝに止まる」(Œuvres., p. 310：邦譯岩波文庫本四八頁、坂田譯本一三五頁) とあるに一致するが、原表のヂクザクの過程が總括さるる『農業哲學』の略表との關連に於ては地主階級より受け取る農産物の賣却代金をもつて生産階級は製作品の購入代金として不生産階級に支出するとするウーグ博士の「完成せられたる原表」その(二)（本稿第七圖、第九圖）及び「バウエルの修正表」や、三邊・久保田兩博士の解説表の方が寧ろ望ましいものと考へられる。然しながらこの「ウーグ博士の修正表」にても亦、「バウエルの修正表」にても、生産階級の年投資の一半が不生産階級に支出せられるとする範式とは相違するものである。

筆者は地主・不生產兩階級へその食料として賣却せる農產物の代金が生產階級のその年度の年投資となるものと解して、それを表の上部の年投資の位置へ移して、その一半が不生產階級へ支出されるものとして範式そのまゝの機構にて解說を試みたのである（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號五三頁記載第七圖參照）。

又ウーグ博士の修正表に在りては不生產階級の投資は貨幣として範式と同樣に記入されるが、博士が生產階級內にて消費せられる農產物三單位と解する生產階級の年投資は表示されて居ないこととなり、從つて又範式の如く農產物の再生產額五單位も記入されて居ないのである。

## (四) 流通する貨幣額に就て

ウーグ博士は『經濟表の分析』の本文の說明を表式化せる三邊博士の解說表や久保田博士の解說第二表の如く、地主階級の所得と不生產階級の投資との總額三單位の貨幣量を以つて範式の循環過程を說明するのであるが、マルクスは、ケネーが不生產階級の投資として「十億の貨幣を金庫に有するといふ事を說明の便宜から假定する」もこの製作品の賣却からでなく、その金庫から自ら流通に投じたところの「十億の貨幣」は「流通過程以前に存在してゐる元本から流通過程に投じたものであるが」それは流通過程に於て直ちに不生產階級に逆流して來るから、この額を不生產階級が生產階級に貨幣で支拂つたのは「今や無駄であつた樣である」として、その解說には貨幣量を二單位とする（本稿第三圖參照）。「バウエルの修正表」、又それと同樣の『經濟表の分析』の要約を表式化せる久保田博士の解說第三表にありても、その貨幣量二單位にて足るものとするが、ケネーは一國所要の貨幣量を農業の純收益額卽ち地主階級の所得額に等しき額を以つて足ることを常に主張してゐる。『經濟表の分析』と同時に發表せられた『重要考察』の第七に「流通正整に行はれ商業が信用と充分の自由とをもつて行はるゝような農業國にあつては、地主の收入に等しき保有貨幣で十分に餘りあるものと考へられる。」（Œuvres., p. 325.）とし、その註の中に「一國民はその收入に應じてのみ貨幣を有すべきである。それより多き量はこの國民には不用である。」（Œuvres., p. 328.）ことを注意してゐる。從つて筆者は範式の解說に、その循環する貨幣總額を地主階級の總所得額に等しい二單位、略式にては二千リーヴル、範式にては二十億リーヴルとして、經濟表（原表）に循環する貨幣額と矛盾なく統一され得るものとした（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號五八頁以下參照）。

## 三

ウーグ博士はこの範式の解釋の上に立つて經濟表（原表）に就てのオンケンの解說を檢討し、生產階級の原投資の利子を考察することによりて、農產物の年々の再生產額を五單位、略式にては五千リーヴル、範式にては五十億リーヴルとし、不生產階級は年投資としての貨幣一單位、略式にては一千リーヴル、範式にては十億リーヴルを支出して、工業の製作品の原料とする農產物を購入し、斯くて二千リーヴルの製作品を製造し得、又生產階級も亦、地主階級に納付すべき貨幣二單位、略式にては二千リーヴル、範式にては二十億リーヴルを保有し得ることとする（ibid., p. 60—62.）。

### 安定均衡の經濟表に就て

斯くして、ウーグ博士は經濟表（原表）に表示されてゐない過程として先づ、生產・不生產兩階級の同一階級內への支出を描き加へ（ibid., p. 73.）次に不生產階級の投資の生產階級への支出過程を更に加へて「完成せられたる原表」Quesnay's "Tableau économique" completed according to the data supplied by Formule を掲載する（ibid., p. 75：本稿第六圖）。

このウーグ博士の「完成せられたる原表」を解說するに、

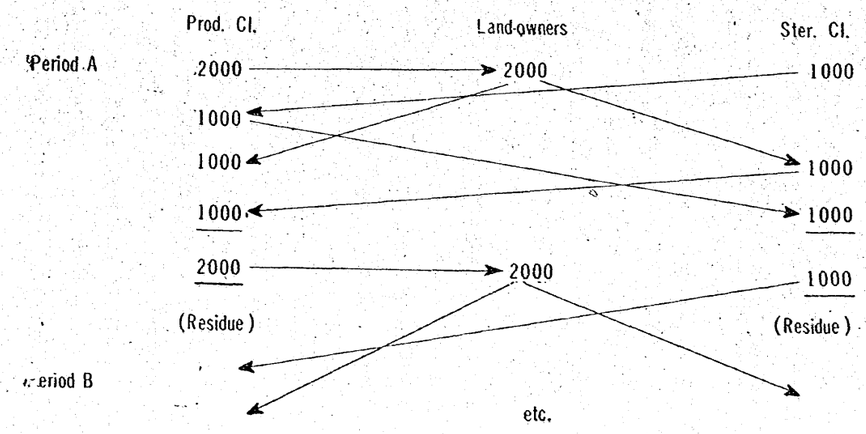
(a)行は不生產階級の年投資の生產階級への支出せられた一千リーヴル（b行）の一半が原表の支出秩序によりて生產階級內に支出せらるゝを表示したものであるが、これは一應は二分せられるも結局全額製作品購入のために不生產階級に支出されるものとなす（e行へ）。

(b)行は不生產階級の年投資（貨幣）一千リーヴルが生產階級へ農產物の代金として支出せられたものであるが、その一半、五百リーヴルは製作品の代金として直ちに不生產階級へ、又他の一半は生產階級へ支出せらるゝも（a行へ）、それも亦、不生產階級へ支出されるものとする（e行へ）。この過程に於て農產物一千リーヴルは貨幣となり、それは更に不生產階級にて製作品に轉形され生產階級に購入されて、その原投資の利子としてその修復に使用されるものとする。

(c)行は地主・不生產兩階級より支拂はれた農產物の代金であるが、ウーグ博士は、これは生產階級に保有せられ、次年度の當初に、地主階級へ納付さるべく中央(d)行に記載されるものとする。この過程によりて純收穫の農產物二千リーヴルが貨幣の形態となりて、

第五圖

ウーグ博士の「修正せられたる範式」



生産階級に保有され得るのである。

(d)行はウーグ博士にては、地主階級に納付すべく流通程過より控除されたる貨幣二千リーヴルと解せられる。

(e)行は地主・生産兩階級より支拂はれた製作の代金であるが、それは原表の支出秩序によつて、いずれも、その一半は農産物の代金として生産階級へ支出され（c行へ）他の一半は製作品の代金として不生産階級内に支出される（f行へ）。この過程に於て製作品二千リーヴルは全額貨幣となり、更にその一半、一千リーヴルは食料とする農産物となり、他の一半、一千リーヴルは不生産階級の年投資の回收として、貨幣の形態にて保有せられるのである（f行へ）。

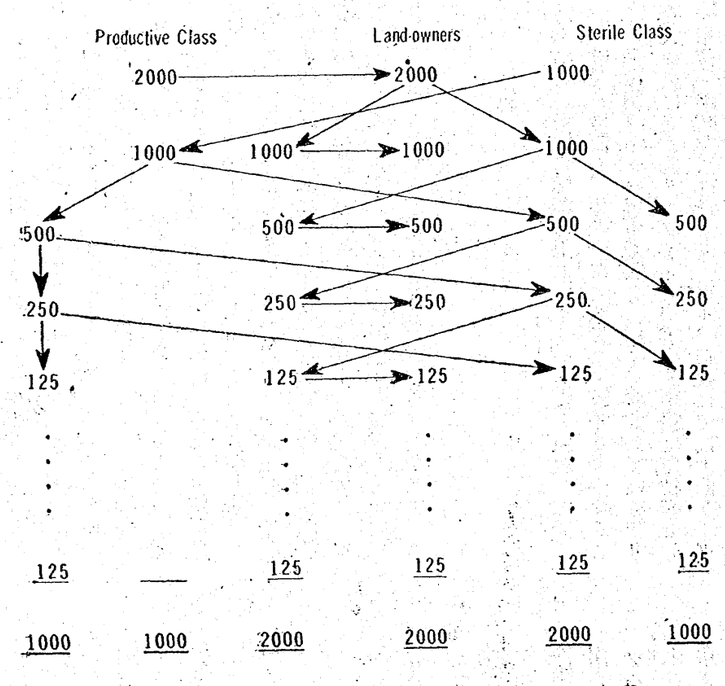
(f)行は不生産階級の製作品購入のために階級内に支出せられた貨幣であつて、それはこの階級の年投資の回收として保有せらるゝ一千リーヴルである（ibid., p. 78—81.）。

このウーグ博士の「完成せられたる原表」にては不生産階級が製作品の原料購入のため支出した年投資一千リーヴルと、地主・不生産兩階級の食料として賣却せる農産物の代金二千リーヴルとは、いづれも生産階級が受け取るものとしてゐるが、ウーグ博士はこの農産物賣却代金三千リーヴル（bとc行）の中いづれを製作品購入のために不生産階級に支出し、又いづれを地主階級に納付すべく保有するかは問題でないとし（ibid., p. 79.）その「完成せられたる原表」（ibid., p. 75：本稿第六圖）にては、不生産階級へ製作品の代金として支出する貨幣は不生産階級より製作品の原料とする農産物の代金として



第　六　圖

ウーグ博士の「完成せられたる原表」　その(一)




支拂はれたるものであつて、地主階級へ納付すべく保有する貨幣は地主階級より農産物の代金として受領するものとするが、同書七四頁に記載される表式（本稿第七圖）にては、不生産階級へ支出する貨幣は地主階級へ賣却せる農産物の代金であり、又不生産階級の投資の生産階級へ支出せられた貨幣は、次に地主階級へ納付せられる一部として生産階級へ保有せられるものとする。

然しながら、ウーグ博士の「修正せられたる範式」（ibid., p. 57：本稿第五圖）との關連に於ては「完成せられたる原表」（本稿第六圖）が適當であり、又原表を總括せる『農業哲學』の略表には同書七四頁の表式（本稿第七圖）の方が關連が明らかである。

ケネーが原表に表示せざるものとする生産・不生産兩階級内の支出(a)(f)を除き、更に原表にては不生産階級に保有せらるゝとするその年投資の支出過程(b)を除けば、この「完成せられたる原表」はケネーの原表に還元し得るものであるとする。

更に、支出の細分過程を綜括し、再生産さるゝ純收穫を除けば、それはウーグ博士の「修正せられたる範式」（ibid., p. 57：本稿第五圖）に一致するものである。

斯くてウーグ博士は範式に表示せらるゝ過程を考察することによりて原表は完成し、ケネーの處論は悉く表現し得、然も亦、經濟表（原表）と『經濟表の分析』の範式との關連が明瞭となるものとする。

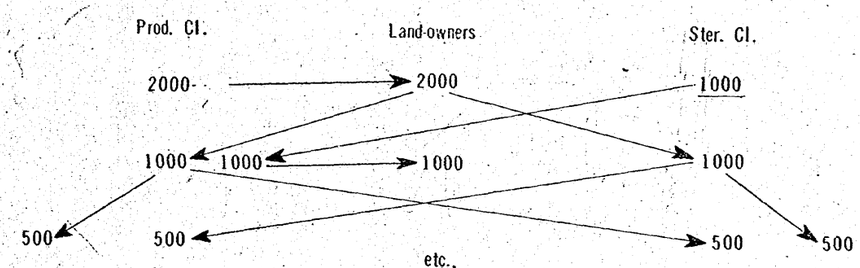
## 四

ウーグ博士のこの結論はケネーの經濟表（原表）と範式そのもの



第　七　圖

ウーグ博士の「完成せられたる原表」　その(二)



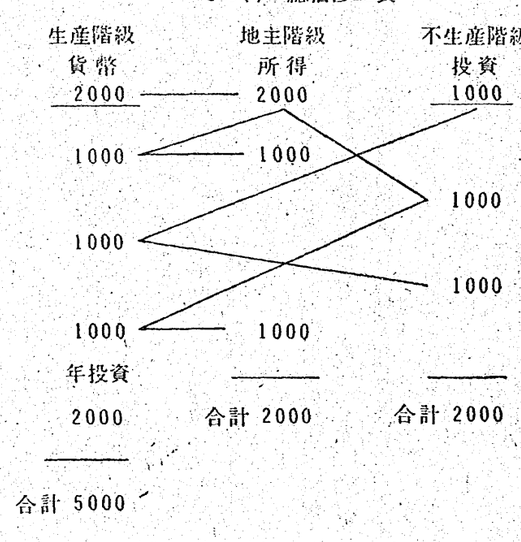

に就てなされたのでなくして、博士の「完成せられたる原表」と「修正せられたる範式」に就て論ぜられたものであるから、先づこの二つの表式の檢討を試みることゝする。

ウーグ博士の「完成せられたる原表」（本稿第六圖及び第七圖）の支出の細分過程を綜括し、さらにそれを範式と比較するために階級内の支出を除去し同じ秩序に配置すれば、本稿の第六圖は第八圖となり、それはウーグ博士の「修正せられたる範式」第五圖となるのである。また第七圖は第九圖となりて、再生産せられる純收穫を除けば、『經濟表の分析』の本文によりて描く三邊・久保田兩博士の解説表に近いものとなる。

第八圖

ウーグ博士の「完成せられたる原表」

その(一)の總括修正表




(一)　生産階級の年投資に就て

この二つの表示に於て明かであるが、ウーグ博士の解説は不生産階級の投資の支出は表示するも、生産階級の年投資の支出に就ては範式の如く表示されてゐないのである。ウーグ博士の「完成せられたる原表」に又「修正せられたる範式」に、ケネーの原表や範式の生産階級の年投資の位置に記入されてある等しい額の數字は一見、その年投資の如く誤られ易いが、その解説によればそれは地主階級に納付せられる貨幣であつて、その年投資でないことを注意せねばならないのである。これを生産階級の年投資とすればビリモヴィッチの解説（ibid., p. 48, p. 49：本稿第一圖、第二圖）の如く、生産階級の年投資も貨幣となり、それが地主階級へ納付せられてその所得となるものと解せねばならぬこととなる。

ウーグ博士は生産階級の年投資は、その階級内で消費する農産物であると解するが、それはこの二つの解説表（ibid., p. 57, p. 75：本稿第五圖、第六圖）には表示されてゐないのであるが、範式との差異を明かにする意味に於て、その二表式を總括し、修正する本稿第八圖、第九圖には末端に農産物再生産總額と共に年投資として別に書き加へて置くことゝしたのである。

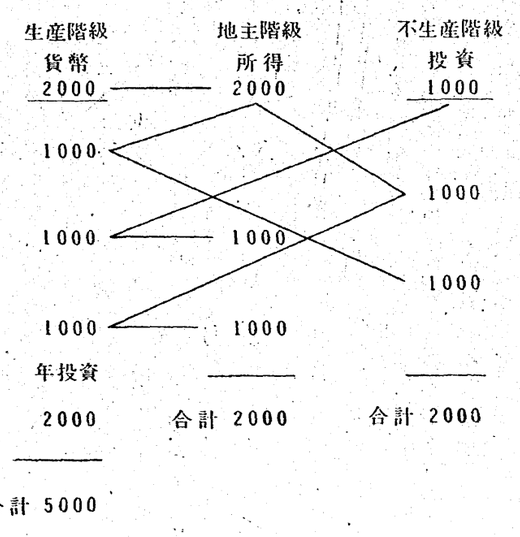
ウーグ博士の解説表式の中央に表示せらるゝ額は生産階級が農産物の賣却代金の中から次に地主階級に納付すべく流通より控除せる貨幣額と解せられ、その合計額が、年初に地主階級に納付せらるゝ一過程として表示されてゐるのであるが、ケネーは經濟表（原表）に生産階級の年投資と地主階級の所得とを點線にて結びその間に「その生む純收益」と註記し、又表の中の階級間の支出過程に於て農産物の賣却代金として生産階級が受領する貨幣はいづれも、年投資となりて、その十割の「再び生む純收獲」を表の中央に記載して居るのである。第二版の『經濟表の説明』は「小作人によつて耕作に使用された年投資六百リーヴルを以つて農夫が前年度に生ぜしめた所の純收獲の賣却は所得六百リーヴルの支拂を地主に與へる（本稿の場合この數字は二千リーヴル）」（ibid., p. i：岩波文庫『經濟表』一八頁）とし又「所得の中、經濟表の秩序に於て生産的支出に移つて行つた三百リーブルは其處へ貨幣で投資を齎らし、それが地主の所得の再生産の一部を成す所の純收獲三百リーヴルを再生産する。而して所得總額は此の同じ階級に歸來する金額の分配の殘餘によつて年々再生産される。（本稿の場合この數字は一千リーヴル）」（ibid., p. ii：岩波文庫『經濟表』二〇頁）とし、斯くて生産階級の年「投資六百リーヴルは此の階級が地主と不生産階級とに對して行ふ賣却によつて貨幣を以て此の階級に齎らされる。（本稿の場合この數字は二千リーヴル）」（ibid., p. iv：岩波文庫『經濟表』二一頁）ことを明かにしてゐる。更に又自國産食料品の消費の增加によつてより多くの貨幣が生産的に支出されるならば、生産階級の年投資の增額となりて、その純收獲は增大し、從つて地主階級の所得增加となることを説いてゐるが（ibid., p. i：岩波文庫『經濟表』一九頁）それは更に『經濟表の分析』に於て「若しも地主がその土地を改良し、その收入を增加せんが爲に、不生産階級へよりも生産階級へ、より多くの支出をなすとすれば、この生産階級の仕事に使用さるゝ支出の增加はこの階級の投資の增加と看做すべきである。」（Œuvres., p. 316：岩波文庫『經濟表』五五頁）とし、又その『重要考察』の第四の中に各階級の「支出が生産階級に回歸するか或いはこの階級から逃避するかに從つて支出が生産階級の投資を增加せしめるか、減少せしめるかに從つて」（Œuvres., p. 320：岩波文庫『經濟表』六三頁）一國統治の良否の結果を知ることが出來るものと論じてゐる。

これ等の處論よりして、ケネーは他の階級に食料として賣却する農産物の代金が生産階級の年投資となり、その十割の純收獲を再生産するとするものであつて、又その半額が製作品購入のために支出せらるゝことゝなるは經濟表（原表）に在りても、又その生産・不生産兩階級間の等比級數的に細分せらるゝ支出過程を括約せる『農業哲學』の略表によつても明かに示めされてゐる。

第九圖

ウーグ博士の「完成せられたる原表」

その(二)の總括修正表




生産階級の年投資に就ての説明はケネーの經濟表第二版の『經濟表の説明』は明かに『經濟表の分析』よりもより滿足すべきものであるが、經濟表（原表）の機構に於ては、その年投資は前述の如く支出過程の中に紛れて見失ひ易いのである。

略式や範式に到つて、初めて投資はいづれも上部の投資の位置に抽出せられて、その位置より支出せられるものとしたのである。

## 五

### (一)　經濟表（原表）の不完全さに就て

ケネーの原表が三つの社會階級間の相互支出の全過程を表示してゐないことはウーグ博士が指摘せられる通りである。

ケネーは第二版の『經濟表の說明』に「支出の秩序を餘りに複雜ならしめないために、」生產階級の投資の利子を別個に考察して農產物再生產額をその年投資の二百パーセントの千二百リーヴルとするが（ibid., p. iii：岩波文庫『經濟表』二一頁參照）、この場合、四千リーヴルであり、從つて不生產階級は製作品二千リーヴルを賣却するも、農產物を購入するは食料とする一千リーヴルに止め、殘りの貨幣一千リーヴルはその年投資の回收として保有するものとする。これは原表が生產階級の農產物の賣却による年投資の回收、それによりて再生產される純收穫――從つて地主階級の所得の再生產を中央に簡明に表示するを主眼とせるがためであつて、原表は原表としての價値があるが、社會三階級間の支出の全過程を、從つて又貨幣の完全なる循環過程を表式する範式こそ、經濟表の完成と看做すべきであろう。數字の細分のために廣い紙面を要する原表の機構は繁雜であり、又全國的數字をそのまゝ使用することは技術的に不可能である。從つて『農業哲學』には「省略せる原表」（ibid., p. 216, p. 217, p. 226.）や、多くのヂクザクの支出過程を「總括せる略表」（ibid., p. 44, p. 116, p. 146.）が使用せられたが『經濟表の分析』や『農業哲學綱要』で「範式」の形式が完成せる後は、最早原表も略表も使用せられずして、ケネーは範式の表式によつて



『（第一）經濟問題』や『第二經濟問題』を解いてゐるのである。

この原表の不完全さを補ふために、ウーグ博士は「完成せる原表」を作成して、表の上部に掲げられた生產・不生產兩階級の年投資の中で、不生產階級の年投資の支出のみ範式に於ける如く、農產物購入のために生產階級に支出すると表示する。原表の上部に掲げられた兩階級の年投資はいづれも前年度のものであつて、生產階級の本年度の年投資は「この階級が地主と不生產階級とに對して行ふ賣却によつて貨幣を以て此の階級に齎らされる」（ibid., p. iv：岩波文庫『經濟表』二一頁）ものであつて、その一半は製作品購入のために不生產階級に支出さるゝのである。原表に在りてはこの過程は三階級間の支出過程の中にあるが範式や略式にては表の上に掲げられた年投資の支出として表示される。

不生產階級の本年度の年投資も生產階級に對して行ふ賣却によつて貨幣を以つてこの階級に齎らさるゝが、原表の表式する範圍に於ては年投資として留保しなければならないものである（ibid., p. iii：岩波文庫『經濟表』二〇頁）。不生產階級の年投資が原料購入のため、支出さるゝのはこの留保せられた貨幣が支出さるゝのである。

「バウェルの修正表」はこの支出を支出の第三過程の二（$3^2$）として表示するが、斯くて、不生產階級は製作品賣却代金の總額を生產階級に支出することゝなり、略式や範式に至つてこの過程が表の上部の投資の支出として明示されることゝなつたのである。

それ故に筆者は不生產階級は製作品の賣却代金の全額を生產階級に支出するものとして「補足せられたる原表」（「三田學會雜誌」第三十八卷第三・四合併號一一二頁第二圖、同誌第八號三三頁第四圖）を描いたのである。更らにこの表の細分の支出過程を總括することによりて得た「補足せられた略表」（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號第五圖）は「バウェルの修正表」（Economic Journal, vol. V, p. 17.）と『經濟表の分析』の要約を表式化せる久保田博士の第三表（『重農學派經濟學』六六―六七頁）と全く同一のものであり、その表示する內容は範式の流通と一致するものである。

「經濟表の分析」の要約に「右上には本年度の收穫を生ぜしむる爲に前年度に支出された生產階級の年投資の額がある。この額の下に、この年投資の額をこの階級が受けとる額の欄から區分する線がある。」（Œuvres., p. 315：邦譯岩波文庫本五四頁、全集二卷二四一頁、坂田譯本一四二頁）と範式の說明をするが、その年投資の支出に就てはその本文に就ても論及することがなく、生產階級は地主・不生產兩階級より受け取る農產物賣却代金三十億――この場合三千リーヴルの內一千リーヴルは不生產階級へ製作品購入のための支拂に用ひる（Œuvres., p. 311：邦譯岩波文庫本四八頁、ケネー全集二卷三一一頁、坂田譯一三六頁）とするが、範式に在りては他の階級から受け取る賣却代金の內から直接支出せらるゝとせず上部の年投資から支出さるゝものと表示する。

而してケネーは既に第二版の『經濟表の說明』には生產階級は地主・不生產兩階級にその食料として賣却せる農產物の代金を本年度の年投資とし、その一半この場合一千リーヴルを製作品購入のために不生產階級に支出することを述べてゐる（ibid., p. ii, p. iv：邦譯岩波文庫本二〇頁、二一頁、坂田譯本二六―二七頁、二八頁參照）。從つて筆者は生產階級が受け取る賣却代金を範式の年投資の位置へ引き上げた後に於てその年投資の一部が不生產階級へ支出せらるゝと解釋したのである（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號五三頁第七圖）。

ウーグ博士はこの生產階級の年投資をその階級が消費する農產物として、從つてその支出に就ては解說せらるゝことがなく、只不生產階級の投資の支出のみに就て考察するのである。

經濟表（原表）に於ては不生產階級の年投資は製作品の賣却によりて回收されるも、それは原料購入のために保有さるゝとするが（ibid., p. iii：邦譯岩波文庫本二〇頁、坂田譯二七頁）、範式にては不生產階級の投資の額は十億であつて、それは原料の購入のために生產階級に支出される（Œuvres., p. 310：邦譯岩波文庫本四七頁、全集二卷二三五頁、坂田譯一三四頁）ものとして表式される。

ウーグ博士は貨幣循環の開始より、地主階級の所得額の外に一單位の貨幣範式の場合十億、ウーグ博士の解說表にては一千リーヴルを假定してゐる（本稿第四圖參照）が、筆者は製作品の賣却代金の一半が投資として回收され、それが投資として範式の投資の位置に引き上げて生產階級に支出せらるゝと解說したのである（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號五三頁第七圖）。

### (二)　經濟表（原表）と範式の關連に就て

ウーグ博士は不生產階級の投資の生產階級への支出過程を補足することによつて經濟表（原表）を完成して、その範式――ウーグ博士が修正せらるゝ範式――への關連を求めてゐる。

然し、それは、本稿第八圖、第九圖に示す如くケネーの範式そのものへの關連ではないのである。

從來一般に經濟表は原表と略表（本稿の範式）との二種あるものとせられ、而も兩者はその記入する數字からも、その點線にて示めさるゝ機構からも別個のものと考へられ、山口正太郎教授は「全體の上から此の兩者を矛盾なく其形式に於ても、果又數字の上に於ても統一することは不可能である。」（『大阪商科大學經濟研究年報』第四號一一頁）とせられたのであるが、地主階級の所得二千リーヴルを基本とする經濟表の原表と略表とを『農業哲學』に、又原表と略式（『經濟表の分析』の範式と同一機構のもの）とを『農業哲學綱要』に挿入、記載して居る點よりしても、ケネーやミラボー侯に在りてはいづれの表式も相互に何等矛盾するものでないことは明らかである。

故に筆者は、前年、佛蘭西の農業再建後の經濟的基本秩序を表式する經濟表諸表間の數字の根據を明かにし、その關係を求め（「三田學會雜誌」第三十八卷第二號）、次いで經濟表の原表から『農業哲學』記載の「省略せられた原表」と「總括せられた略表」（"Philosophie rural", p. 44, p. 116.）へ、更にそれを「補足せられた原表」と「補足せられた略表」に導き、『經濟表の分析』の範式へと到達せる過程を探つたのである（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號）。坂田教授はこれ等拙稿に就て「それぞれの段階を必ずしも發展の姿においては把へえず、それぞれの表式を同時存在的に眺めて、それらに檢討の手を加へてゐる。そこにここでの解說者の方針とあきらかに相違する點がある。」（『ケネー經濟表』八六頁）と批判せらるゝが筆者としては「數字と機構との兩面より經濟表を發展的に考察」（「三田學會雜誌」第三十八卷第八號七二頁）せんとしたものであつて、地主の一戸平均の所得四百リーヴルを基本とする初版の經濟表の數字の論據を『穀物』論に算定する佛蘭西の農業再建狀態に結びつけることによりて經濟表の生成の過程を、更に各經濟表の原表から範式への前提の推移と、原表から範式への機構の變化をケネーの構想の推移から探究を試みたもので、最初の論稿をこの意圖によりて「經濟表の生成發展」と題したのである。

その檢討の結果、筆者は範式をもつて經濟表の完成と解するものであるが、尙、原表も略表も範式も夫々の前提の下に於て、相互に何等矛盾することなく、又同時に存在し得ると考へるものである。

次の機會にウーグ博士の經濟循環不均衡の經濟表の研究を中心として當時の佛蘭西に於けるその實踐的性格の檢討を試みることゝする。

学界展望

# 一九五六年下半期の國際經濟學における二つの問題

白石孝

一九五六年下半期において、國際經濟學上二つの問題が殊に注目をひいた。一つは賠償支拂に關するものであり、他の一つは交易條件に關するものである。學會においても、アジア政經學會が「賠償とアジア經濟」という共通論題をかかげ、國際經濟學會では「經濟發展と外國貿易」の題目のもとで、交易條件の問題が扱われた。

賠償支拂については、既にビルマ、フィリッピンに對する具體的問題をめぐつて、これまで多數の意見が述べられ、アジア問題第五卷第一號で「賠償問題と經濟協力」が特集されて、ほぼその論點をつくしている感がある。しかし、今日の賠償が東南アジアの開發に對する經濟協力を特徴とし、更にこれを通じて相手國との貿易擴大が望まれるかぎり、賠償の方式に論議が集中するのは當然である。

小島清氏の前掲誌上の論文「賠償と貿易擴大」並にアジア政經學會での報告は、これについて興味のある問題を提示するものであつた。卽ち「日本の賠償支拂政策は、賠償輸出と商業輸出とを嚴別し、少くとも商業輸出を減少させることなく、いなそれをも增加させつつ賠償額だけは確實に追加的輸出增加をもたらそうというのである」。そのため「今まで輸出しにくかつた特定商品を受取らせるようにしばりつけようとしている」。しかし、このような日本の獨善的意圖がうまく推捗するものかどうか、「この獨善こそが新しい賠償支拂困難を生みつつあるのではあるまいか」。また「日本の賠償支拂政策が實物、役務賠償を固執することは、この拘束双務的トランスファー主義を貫かんとすることにほかならず、これは結局『小さな菓子の大きを分前を取る』ことで、現金賠償に近い方法で行つた場合に實現できるであろう『大きな菓子の公平な分前を得る』ことよりも、賠償請求國にとつては勿論、日本にとつても好ましくないことではあるまいか」。これが小島清氏の根本的疑問であり、實物・役務賠償が現金賠償より好ましいとする考え方を批判する。しかも資本財賠償に拘束する方式には反對する理論的根據を明示する。

ケース(A)では資本財と消費財の自由選擇を、ケース(B)では資本財にのみ拘束した場合を扱い、その效果を比較する。まずケース(A)では、賠償請求國の經濟開發用投資Iは、$m\cdot k\cdot I$ だけの對日誘發消費財輸入と直接に $p\cdot q\cdot I$ だけの對日資本財輸入をもたらす（$k$＝國民所得乘數、$m$＝對日限界輸入性向、$p$＝資本財輸入對日割合、$q$＝投資中資本財輸入割合）。それは對日國際收支均衡においては日本からの賠償年額Rと對日輸出增加額Eに等しい。卽ち、

$$m\cdot k\cdot I+p\cdot q\cdot I=R+E \quad \text{or} \quad I=\frac{R+E}{m\cdot k+p\cdot q}$$

ケース(B)では日本からの賠償年額は資本財に拘束されているから、開發投資による誘發的消費財輸入は專ら對日輸出增加分のみか